

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02354

研究課題名(和文) 今日のピアノ演奏教育におけるフラット化の問題についての実践的思想史的な研究

研究課題名(英文) Problems of flattening world : epistemological studies of historical practices for the contemporary piano educations

研究代表者

小坂 圭太 (Kosaka, Keita)

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：20376966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：近年音楽学生や若い音楽家にメロマニア的欲望や熱狂が薄れ、情報の集積体としての楽譜を演奏スキルで処理する事で完結する傾向にあるのは何故かを、情報フラット化の概念との関係で考察した。そして、通常ポストモダンの典型と見做されるこうした傾向が、実は近代の前衛(芸術家達)の進化へのモチベーションとの連続性を持つのではないかと、という視点で読み直した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

音楽作品(西洋近代の所謂クラシック音楽の末裔としての音楽作品)と演奏の世界で、ひと口にポストモダンの潮流、と言われて来た事象の再検証と読み替えを通じて、伝統の地下水脈とのアクチュアルな接点を指定した。それにより、価値観が多様化しているにもかかわらずそれらの中庸的・公約数的価値で評価が進み易い教育現場(特にピアノ教育の)に対する新しい評価基準へのアプローチを試みた。

研究成果の概要(英文)：It seems undeniable that the young musicians and students today show less and less their enthusiasms and desire for music itself, and, instead, that they find pleasure in being enclosed in the process of treating musical texts as assemblages of information. But this general tendency has not yet been clearly exploited, nor explained. Through our studies, it is elucidated that, these cultural phenomena This research studies of re-reading the modern cultural history bring us to the conclusion that this contemporary tendency, which is often too approximately attributed to so-called "typical Post-modern", has, in fact, a continuity to the motivation for the evolution that had existed among the modern artistic Avant-garde. are evidently caused by the general movement of "flattening world".

研究分野：ピアノ演奏

キーワード：フラット化 ピアノ演奏教育 モダンとポストモダンの連続と断続

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

演奏家を志す若い人が、自らの固有名詞で存在意義を発信して広めて行くことを志す存在である筈にもかかわらず、他者の固有名詞に対し(という事はそれぞれの人が背負っている精神的背景に)無頓着になった。過度の商業主義によるアーティストのアイコン化が作用しなくなった、など積極的に捉えられる側面もあるにせよ、媒体がレコードやCDから、コンピュータ上の情報をクリックするという形になり、刹那的偶発的に単なる情報として選択し参考意見として取捨する、という行動様式は、「他者の作品を演奏する事で何らかの自己表現として外の世界とのコミュニケーションを図る」という有り様に対する暗黙の了解が変容して来ている事を意味する、と言えよう。

また同時にかつては自明だった、その時代毎の様式(作品/演奏スタイルそれぞれの)が価値観の多様化で、様式自体もその根拠となる考え方とのマッチングもばらばらになった。例えば、ロマン派の作品といえども20世紀中葉頃は大袈裟なテンポ・ルバートをかけようものなら時代遅れのスタイルと見做されたが、そこには時代遅れと見做される事自体が論難されるべき、という価値観が当然の前提として在り、それを共有出来ないことが個々人の資質の欠如と考えられていたが、昨今ではそうした進歩史的な考えを無意識に内包する言説の効力が失われて来た。そして、こんにちその様な大袈裟なルバートをかけた演奏に接したとして、その奏者が個人のテンペラメントの趣くままにそう弾いているのか、現代がネオロマンチズム回帰の時代だという主張の許にそうしているのか、或いはルネサンスやバロックなどの古楽に対するオーセンティシティ尊重の態度をロマン派のテキストにも持ち込んだ結果なのかは、にわかには判別し得ないという事態が生じている。

音楽学に於ける楽曲研究がかつての一次資料万能主義から脱却し演奏(上演)史・受容史的な物を射程に入れた言説が増えて来た、まさに同じ時期に、作曲家の身体感覚のドキュメントとして第一級の資料である筈の彼ら自身の運指法が、原典版を標榜する出版物に於いてさえ、教育者による簡便さ・弾きやすさ優先の書き換えられる(即ち、指遣いはテキストの重要な一部を成す、という考え方の放棄)事が常態化する、という一見して背馳する事象が同時進行的に起こり、エスカレートして来た。

2. 研究の目的

前項に記した様な事象がなぜ起こるのかを、様々な領域で同時代的に起きている現象と結びつけながら考察する。同時に、ポストモダンの特色である相対化が、演奏教育の現場で進歩史的な考え方の「尾骸骨」と共存可能なのかを検討する。例えば、かつては二つの作品のどちらが世代の新しい物かを知らないわからないなどということは音楽を学ぶ者として論外とされたが、時系列を敢えて誤認する事も視野に入った現在ではどうなのか、科学的根拠に基づく歴史と神話を未だ学術的な場面では優劣を伴う価値観ではっきり境界付けていないか、そして何より、いかにテキストを進歩史観から解放された物として捕捉しても、そこで要求される「技倆」にはテクノロジーと類似性を持つ進歩史観の刻印がある以上、その齟齬をどう埋めるべきなのか、等々である。

その上で、それらの現象に通底する、目的と手段/原因と結果の半ば故意のはき違えによる了解が、ポストモダンと呼ばれる時代に固有なトレンドなのか、そもそも近代の進化の原動力がそうしたはき違えの中に在ったのかを検討する。そうした作業を通して、現在の多様化する嗜好の中から、時代精神と看做し得る要素を抽出し、演奏と教育実践の中で演繹する事を目的とする。

3. 研究の方法

《当初の背景》で述べた事に関しまず、歴史的に「有名」という概念とその価値観の変遷や、近代の芸術家の有り様の推移を、各分担者とのディスカッションにて再確認する。

勤務先であるお茶の水女子大学始めとする音楽を専攻する学生に対する聞き合せ、及び実技指導中に特定のトピックに対しディスカッションを通じ意識調査する。

新刊の楽譜の編集方針や意図の分析を行い、学問的な軸足が例えば同じ出版社の旧版とどう違って来たかを検証する。新たな媒体(you tube 等)を最初から前提として作成された音源や画像の演奏内容及び想定される演出意図の分析を行う。その様な作業を通じ、様々な作品が各々の時代精神に即して成立している部分と、既に異化作用を作品に内包している部分とを切り分ける様な読み筋を措定する。それらを、一時は評価が低かった編曲ものが20世紀末から復権した理由などと関連付けて考察、実演する事での成果を目指す。

4. 研究成果

上記の方法論を意識化した物として18年6月に日本18世紀学科の例会で行った「20世紀が変奏した18世紀」のコンサートで、反響が多く寄せられた。

学生とのディスカッションや、上述の意図に基づく指導などを通じ、表面的にはかなり伝統から隔絶した恣意性を体現するよう見えるポストモダン以降に出生した世代も、価値観の伝統的な上下には敏感であり、かつ事象の歴史的反復性に関心が高い事が窺えた。

また同時に、ポストモダン初期に一口にポストモダンのと言われた諸相がむしろロマン派から連続性のある、モダンの極端な概念拡張に基づくものとして見做し得る部分が、この研究の期間に起きた演奏の世界での出来事も含め、増大している事が見受けられた。今後ますます、「ポストモダンの特質」が「レイトモダンの変奏」として呑合されゆくのではないかという仮説に基づき、「1970年以降」に関する読み替えを更に行っていく為の問題点の洗い出しを行った。一例を挙げれば、1960年代の主要なムーヴメントの一つであるミニマルミュージックに対する、70年代におけるリゲティのアプローチがどれほど、ロマン派テキストの「整然とした拍節感があらわされたテキストに対し奏者たちはちょっとずつその記譜から逸脱した周期で拍を感じる」という暗黙知に依拠していたのか、などの検証と実演へのフィードバックなどである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 淳二 (Sato Jyunji) (30282544)	京都大学・地球環境学堂・教授 (14301)	
研究分担者	岡田 暁生 (Okada Akeo) (70243136)	京都大学・人文科学研究所・教授 (14301)	
研究分担者	立木 康介 (Tsuiki Kosuke) (70314250)	京都大学・人文科学研究所・准教授 (14301)	
研究協力者	中川 俊郎 (Nakagawa Toshio)		作曲家 日本現代音楽協会理事